デーリー東北新聞社提供

デーリー東北
2020年（令和2年）4月9日（木曜日）（15）

私見創見 Thursday

コケ目線で観察の勧め

奥入瀬の自然

鮎川恵理
八戸工業大
生命環境科学科准教授

あゆかわ・えり　1973年東京生まれ。総合研究大学院大博士課程修了。2004年から八戸工業大で勤務。植物生態学が専門で、コケ植物の生態や海岸植生が主なテーマ。青森県環境審議会委員などを務める。00～01年の第42次南極観測隊に参加した。

春先、私の目に入るのは、枯れ草の中でひときわ鮮やかな緑色を見せるコケ植物である。大学の卒業研究の頃から始まったこの「コケ目線」は、かれこれ20年以上になる。3月、氷点下の時間帯が減り、液体の水が得られるようになると、縁石の隙間のヤノウエノアカゴケや空き地のハイゴケなどが、一気に活動を始める。

草花や樹木が時間をかけて休眠芽を目覚めさせている間に、その特別な組織をもたないコケは、すばやく光合成を始めていた。先月、新型コロナウイルス対策の休校で家に籠るわが家の小中学生の気分転換に行った奥入瀬渓流でも、少しずつ春が始まっていた。

奥入瀬渓流は2013年に日本蘚苔類学会が認定する「日本の貴重なコケの森」に認定された。蘚苔類というのは、スギゴケなどの蘚類、ゼニゴケなどの苔類、その他ツノゴケ類と呼ばれる3グループを合わせて指す言葉で、コケ植物の意味である。

「日本の貴重なコケの森」は貴重なコケやコケが豊富で美しい自然度の高い場所を広く知ってもらい、その場所が長く守られるよう、日本蘚苔類学会が06年から選定している。屋久島や北八ケ岳白駒池周辺など、コケで有名な観光地のほか、全国に計29カ所。その中で、奥入瀬渓流の主な選定理由は、コケがいたるところに分布しており、コケが景観上重要な役割を果たしていることである。

初夏になるとテレビやポスターなどでよく目にする奥入瀬渓流の景色を思い出してほしい。渓流の流れ、樹木、木漏れ日が目に浮かぶのではないだろうか。同じ景観でも「コケ目線」で見てみると、実は写真のかなり広い面積をコケが埋めていることが分かる。

渓流の中の岩に張り付くタニゴケやアオハイゴケは、着生しているコケが剥がれない適度な水圧にしかさらされず、鉄砲水のような激しい水流が長く起きていないことを示している。地上の岩の上部には、トヤマシノブゴケやコツボゴケ、下部にはエビゴケやオオトラノオゴケというように、ひとつの岩の中でもさまざまな微環境の違いによる住み分けが起きている。

岩、倒木、樹幹にぎっしりと着生するコケは、この谷が約1万5千年前の十和田湖の大洪水でつくられた非常に深い谷で、湿度がたまりやすい地形であることを示す。ブナやミズナラからなるブナ林やサワグルミ、カツラなどからなる渓畔林の樹冠は、成熟した森でほぼ密閉しているので、コケの成長に必要な湿度がいっそう保たれる。

ここでは多くのコケがそれぞれの特性に合う環境に生育し、約300種もの蘚苔類が生育している。標高差200㍍という狭い標高差の中でのこの種数は、八ケ岳の標高1500～2890㍍という広い標高差に生育するコケの種数にほぼ匹敵する。

なぜ、このように多くの種の分布が可能なのだろうか。

コケ植物は進化の歴史の中で、もっとも先に水中から陸上に上がった植物で、根、茎、葉の器官の分化がない非維管束植物である。頑強な茎がないため、垂直方向にサイズを大きくできず、国内では大きくても5㌢ほど。その個体の小ささから、ほんのわずかな環境の違いが命取りになり、水分や傾斜、日当たりなどの少しの違いが、種の分布に影響する。

奥入瀬渓流は深い谷の地形、タイプの異なる天然林、極端な変動のない水流、渓流に流れ込む滝、転石などの多種多様な微環境が、長年にわたり保たれているからこそできたコケ天国なのである。

この春は人混みに出掛ける訳にはいかない状況にあるが、森や渓流には人はそうそういない。コケをよく知るネーチャーガイドとのコケ散歩が本当はお勧めなのだが、このご時世、心配があれば、図鑑と虫メガネやルーペ、カメラ代わりのスマホを片手に、まずは家の庭から、初めてのコケ観察はいかがだろうか。

奥入瀬渓流の自然に関する本やコケ図鑑は、すでに青森県庁の協力を得て出版されている。自動車でのアクセスもよく、こんなにコケ観察に必要なアイテムに恵まれた場所はなかなかない。（本や図鑑についてはNPO法人奥入瀬自然観光資源研究会＝通称おいけん＝ホームページでの購入が可能）